

変化事象と創造事象における構文拡張の方向性に関する一考察 —結果構文と穴あけ構文の分析を通して—

貝森 有祐

要旨

本稿の目的は英語の結果構文と穴あけ構文を考察対象として、それぞれの構文に見られる連続性とこれらの構文の間にある平行性を示すことである。両構文において、動詞自体が{状態変化/穴の創造}を含意する弱い構文と、動詞がそれらを含意しない強い構文があることが先行研究(Nonaka 2010; Washio 1997)で指摘されている。本稿ではそれらの下位分類をより詳細に検討することを通して、強い構文には[同一参与者]に基づくもの、[全体-部分]に基づくもの、[接触]に基づくもの、[隣接性]に基づくものという連続性が結果構文・穴あけ構文に共通して見られることを明らかにする。このような構文内の連続性と構文間の平行性、動詞が語彙的にプロファイルする参与者と構文によって与えられる参与者とのメトニミー的關係について、認知構文論の枠組みから統一的説明を与えられる可能性を提示し、参与者間の關係に注目することによってGoldberg (1995)では示されていない構文拡張の側面があること、結果構文と穴あけ構文に類似した意味的制約が課されることを明らかにする。

キーワード：結果構文，穴あけ構文，非下位範疇化目的語，認知構文論，行為連鎖

1. はじめに

本稿の目的は英語における結果構文 (resultatives) と穴あけ構文 (*a hole constructions*) について、それぞれの構文に見られる連続性を示し、また、それらの間にある平行性を示すことである。結果構文と穴あけ構文とはそれぞれ (1) と (2) に挙げるものを指す。

- (1) a. John broke the vase into pieces.
b. He sneezed the napkin off the table. (Goldberg 1995: 55)
- (2) a. John dug a hole in the ground.
b. He was teaching himself to dance so that he could impress a real pretty gal named Sally Sugartree, who could dance a hole through a double oak floor. (The Corpus of Contemporary American English (以後 COCA と略記), cited in Nonaka 2010: 91) ¹

結果構文とは、動作主が対象へと動詞で示される行為によって働きかけ、その結果として、対象が結果句で示される位置変化または状態変化を受ける事象を表すものである²。穴あけ構文とは、動作主が場所句によって示される対象へと動詞の行為によって働きかけ、その結果として、対象に「穴」があく事象を表すものである。

結果構文は対象の変化を表し、目的語参加者は行為の影響を受ける対象 (affected entity) である (cf. Quirk et al. 1985: 741)。例えば (1a) において、「花瓶」は行為前から存在しており、*break* という働きかけを加えた結果、「壊れた花瓶」へと変化する。これに対して穴あけ構文は対象の創造を表し、目的語参加者は行為の結果産物 (resultant object) を表す (cf. Quirk et al. 1985: 750)。例えば (2a) において、「穴」は行為前には存在しておらず、*dig* という働きかけを加えた結果として初めて生じてくるものである。このように、結果構文は変化事象、穴あけ構文は創造事象をそれぞれ表していると言うことができる。

結果構文や穴あけ構文に特徴的なこととして、動詞の非下位範疇化目的語を伴うことがあるということがある。(1a) と (2a) においては動詞が目的語を語彙的に選択しているが、(1b) と (2b) における目的語は動詞が選択するものではない。そのため、結果句を省略した **He sneezed the napkin* や場所句を省略した **Sally Sugartree could dance a hole* のような文は不適格となる。

本稿における問題設定と目的は以下の通りである。

- (3) a. 結果構文と穴あけ構文の分類についてより詳細に検討する。Nonaka (2010) において結果構文と穴あけ構文の分類に平行性があることが指摘されているが、本稿では特に動詞の指定する参加者と構文によって与えられる参加者との関係に注目することでこれらの構文の下位分類をより詳細に検討し、両構文に類似した連続性が見られることを示す³。
- b. 結果構文と穴あけ構文に見られる連続性とそれらの間の平行性について、認知構文論 (Cognitive Construction Grammar) の観点から統一的説明を与えることができる可能性を示す。
- c. 上記の観点から考察することを通して、Goldberg (1995) では明確に示されていない構文拡張の側面があること、結果構文・穴あけ構文に類似した意味的制約が課されることについて明らかにできることを示す。

第2節では結果構文と穴あけ構文に関する先行研究として影山 (1996) の語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure) を用いた研究を取り上げて概観するとともに、その分析の問題点を示す。第3節では結果構文と穴あけ構文の分類について詳細に検討する。第4節では結果構文と穴あけ構文の分類や特徴について認知構文論の観点から考察し、その帰結について述べる。第5節では本稿の議論をまとめ、今後の研究課題について述べる。

2. 先行研究 (影山 1996)

本節では影山 (1996) の提案する結果構文と穴あけ構文の分析について概観し、その問題点を示す。影山は語彙概念構造を用いて、結果構文と穴あけ構文に以下のような分析を与えている。

- (4) a. He shot the bear dead. (影山 1996: 259)
b. [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-DEAD]]
- (5) a. He kicked a hole in the wall. (ibid.: 280)
b. [x ACT ON z] CAUSE [BECOME [a hole BE AT-IN-the wall_z]]

(4b) で言うと、[x ACT ON y] が上位事象、[y BECOME [y BE AT-DEAD]] が下位事象である。影山は結果構文について、「許容度の差は、上位事象と下位事象の意味的・認知的な繋がり具合に原因を求めることができる」(p. 259) と述べている。即ち、「彼が熊を撃つ」ということを表す上位事象と、「熊が死んだ状態になる」ということを表す下位事象に、同一の対象物 (y = the bear) が共通して関わっており、これにより原因と結果の繋がりがはっきりと理解され、適格な文になると論じている。

穴あけ構文については、「[(5b)] のような作用の連鎖が読み取れる。[...] このような連鎖がない場合には、この hole 構文は成り立たないのではないかと推測できる」(p. 280) と述べている。即ち、「彼が壁を蹴った」ということを表す上位事象と「壁に穴があいた」ということを表す下位事象の間に、動作主 (x = he) から対象 (z = the wall) への作用の連鎖が読み取れる時、適格な文が得られると論じている。

以上影山の分析を概観したが、この分析にはいくつか問題点がある。まずは以下に示す結果構文と穴あけ構文について、影山の分析では適切に容認性を予測することができない。

- (6) a. The chef cooked the kitchen walls black. (Carrier & Randall 1992: 184)
b. [x ACT ON y] CAUSE [z BECOME [z BE AT-BLACK]]
- (7) a. He was teaching himself to dance so that he could impress a real pretty gal named Sally Sugartree, who could dance a hole through a double oak floor. (=2b)
b. [x ACT] CAUSE [BECOME [a hole BE AT-THROUGH-a double oak floor_z]]

(6) と (7) においては、影山の言う上位事象と下位事象の「意味的・認知的な繋がり」や「作用の連鎖」が適切に成立していないように思われる。(6b) において、上位事象は

「シェフが食材（または食事）に働きかける」（ $x = \text{the chef}$, $y = \text{食材か食事}$ ）ということを表し、下位事象は「台所の壁が黒くなる」（ $z = \text{the kitchen walls}$ ）ということを表しているが、上位事象と下位事象の間で共有される参加者が存在せず、繋がりが成立しないことになってしまう。(7b)においても、「*Sally Sugartree* が踊る」ということを表す上位事象 ($x = \text{Sally Sugartree}$) と「床に穴があく」ということを表す下位事象の間に共有される参加者は存在しないため、作用の連鎖が読み取れない (cf. Nonaka 2010: 90-1)。従って影山の分析では、(6a), (7a) とともに完全に不適合であることを予測してしまう。

また、結果構文では「上位事象と下位事象の意味的・認知的な繋がり具合」が問題になるとしており、(4b) で結び付けられているのは全て y という同一の参加者である。一方で穴あけ構文においては「作用の連鎖」が問題となるとし、(5b) で結び付けてられているのは x と z という異なる参加者である。このように結果構文と穴あけ構文で異なった言い方、異なった参加者の結び付け方を行っているが、これらが異なった現象（または操作）であるのか、それとも同じ現象であるのか、これだけでは不明瞭である。

語彙概念構造を用いた影山の分析では結果構文と穴あけ構文の容認性について適切に予測することができず、また容認性を決定する要因が不明瞭であることを見た。

3. 分類と特徴

以下では結果構文と穴あけ構文の分類、そしてそれらの特徴について詳細に検討していく。

3.1 結果構文の分類

Washio (1997) によれば、結果構文は弱い結果構文 (*weak resultatives*) と強い結果構文 (*strong resultatives*) に分類できるとしている。

- (8) a. *Mary dyed the dress pink.* (Washio 1997: 10)
- b. *John hammered the metal flat.* (*ibid.*: 8)

弱い結果構文とは、動詞が語彙的に含意している結果状態について結果句がさらに詳述するものを言う。(8a)において、動詞 *dye* は元々「対象が染まった状態にする」という状態変化の意味を含意しており、結果句 *pink* はその状態変化についてより詳細に（具体的に何色に染まったか）特定するものである。これに対して強い結果構文とは、結果句の意味が動詞の意味とは独立しているものごとを言う。(8b)において、動詞 *hammer* はそれ自体では状態変化を含意しておらず、働きかけ（ハンマーで叩いた）のみを表している。しかし結果句 *flat* が付加されることによって初めて文全体で状態変化の意味を表すようになる。

以下強い結果構文について、その下位分類と性質について見ていきたい。

- (9) a. John hammered the metal flat. (=8b)
 b. John kicked the door open.

(9) では、動詞によって示される行為を受ける参加者と、結果句によって示される変化を被る参加者が同一である。例えば (9a) において動詞が示す働きかけ (*hammer*) を受けるのは、*John hammered the metal* において *the metal* が動詞の元々とする目的語であることから明らかなように、*the metal* である。結果句が示す変化 (*flat*) を被るのは、*The metal is flat* という意味関係が成り立つことから明らかなように、*the metal* である。このことから、動詞の働きかけを受ける参加者と結果句の変化を被る参加者が同一のものであることが分かる。(9b) についても同様のことが言える。(9) のタイプの結果構文を、動詞が語彙的に伴う参加者と結果句の示す変化の対象となる参加者との関係に基づき、**[同一参加者] に基づく結果構文**と呼ぶことにする。

- (10) a. She broke a leg off the table. (鈴木 2011: 19)
 b. She melted the handle off the pot. (ibid.: 24)

(10a) は「彼女はテーブルを壊して、その脚をテーブルから外した」という意味を表し、(10b) は「彼女はポットを溶かして、その取っ手をポットから外した」という意味を表している。ここで、それぞれの文は非下位範疇化目的語を伴っていることに注意されたい。例えば (10a) において、実際に壊したのは「テーブル」であり「(テーブルの)脚」ではないため、動詞 *break* は語彙的には *the table* を伴って *She broke the table* となるはずであるが、目的語位置に *a leg* が生起している。結果句がなければ意図する読みにおいて *a leg* は目的語位置に生起できない (**She broke a leg*)。従って、動詞 (*break*) の表す行為を受けるのは *the table* であり、結果句の示す変化 (*off the table*) を被るのは目的語位置に生起している *a leg* である。それらの間には同一参加者 (*the table*) における「全体-部分」の関係が成立している。従って (10) のタイプの結果構文を **[全体-部分] に基づく結果構文**と呼ぶことにする。それぞれの参加者 (*the table* と *a leg*) は全く同じ参加者ではないものの、同一参加者の [全体-部分] という非常に緊密な関係にあることが分かる。

- (11) a. John wiped the crumbs off the table.
 b. The joggers have run the pavement thin. (Carrier & Randall 1992: 217)

例えば (11a) における動詞 *wipe* は語彙的には場所を目的語としてとるため *John wiped the table* となるはずであるが、目的語の位置に *the crumbs* という非下位範疇化目的語が現れており、*the crumbs* が *off the table* という変化を被ることになる。このことから (11a)

において、動詞の働きかけ (*wipe*) を受けているのは *the table* であり、結果句の変化 (*off the table*) を被るのは *the crumbs* である。さらにこれらの参加者の間には「接触」の関係があることが分かる。「テーブル」と「(そのテーブルの上にある) くず」は物理的に接触しているからである。このことから、(11) の結果構文を **【接触】に基づく結果構文** と呼ぶことにする。それぞれの参加者は「接触」という関係にあるものの別個の参加者であるため、[全体-部分] と比較すると参加者間の緊密性は低下していると言える。

- (12) a. He sneezed the napkin off the table. (=1b)
b. The chef cooked the kitchen walls black. (=6a)

例えば (12a) において、動詞 *sneeze* は自動詞であるので元々目的語は伴わないが、Horita (1995: 161-162) や谷口 (2005: 124-126) などは *sneeze* のような非能格自動詞 (*unergative verbs*) を、主語参加者が自らに対して内在的な力でもって働きかけ、自らのエネルギーによって行為を成しているものと考えている。その考えに従い、動詞の行為 (*sneeze*) を受けているものは *He'* であるとする。*off the table* という位置変化を被るのは、*He'* と隣接関係にある *the napkin* である。(12b) についても同様であり、動詞 (*cook*) が語彙的に指定する参加者は「食材、又は食事」であり (*cooked the {meat/meal}*)、*black* という変化を受けるのはそれと隣接関係にある *the kitchen walls* である。このことから、(12) の結果構文を **【隣接性】に基づく結果構文** と呼ぶことにする。それぞれの参加者は別個のものであり接触もしていないため、参加者間の緊密性は今まで見てきた例と比べると最も低い。

なお、この分類は連続体を成しており、下位分類間の境界は曖昧 (*fuzzy*) である点に注意されたい。即ち、ある例が必ずしもある特定の下位分類にきれいに当てはまるとは限らない。例えば (9b) は、動詞の働きかけ (*kick*) を受けるのはドアの板 (*barrier*) の部分、結果句の変化 (*open*) を被るのはドア全体 (*unitary structure*) と考えることも可能である (cf. Iwata 2006: 466)。

以上のように、動詞の働きかけを受ける参加者と結果句の変化を被る参加者との関係という観点から様々な例を見てみると、(8a) から (9) , (10) , (11) , (12) と行くに従って、働きかけの影響が (目的語によって表される) 変化対象に及ぶ範囲で参加者間の緊密性が弱くなっていることが分かる。[同一参加者] の関係であれば動詞が示す働きかけの影響が結果句の示す変化対象に及ぶことが容易に理解される。しかし[隣接関係] のような参加者間の緊密性が弱い関係であると、動詞の示す働きかけが変化対象に及ぶことを理解するには、時には特別なコンテキストを想定するなどして、何らかの力の作用を読み取ることが可能である必要がある。例えば (12b) について、Carrier & Randall (1992) は容認可能であるとしているものの、インフォーマントチェックをしたところ、9人中8人が不自然であると判断した。これは、参加者間の物理的位置関係は[隣接関

係]にあるものの、*cook* という働きかけが *the kitchen walls* に及ぶと解釈することが困難であることに依っているものと思われる。従って (12b) については、参与者間関係の緊密性が弱くなることで力の作用を読み取ることが困難となり、そのため多くの話者にとって容認性が低下しているものと思われる⁴。

3.2 穴あけ構文の分類

次に、穴あけ構文の分類について考えてみたい。Nonaka (2010) は穴あけ構文を結果構文と平行的に、弱い穴あけ構文 (*weak a hole constructions*) と強い穴あけ構文 (*strong a hole constructions*) に分類している。弱い穴あけ構文とは、動詞自体が「穴の創造」を含意しているものである。強い穴あけ構文とは、動詞自体は「穴の創造」を含意していないものの、目的語位置に *a hole* (または *holes*) を伴い、さらに場所句を後続させることによって、文全体として「穴の創造」を意味するようになるものである。

- (13) a. John dug a hole in the ground.
b. He bores a hole in the plank. (Jespersen 1927: 233, cited in Nonaka 2010: 93)
- (14) a. Frances kicked a hole in the fence. (Levin & Rapoport 1988: 278, cited in Nonaka 2010: 89)
b. I'd been stingy about wearing them because I didn't want to walk holes in the soles before my feet got big enough to fill them. (Gray, Dianne E. *Together Apart* 20, cited in Nonaka 2010: 101)

(13) に挙げたのは弱い穴あけ構文の例であるが、例えば (13a) において、動詞 *dig* はそれ自体で穴をあけることを含意している。(14) に挙げたのは強い穴あけ構文の例である。例えば (14a) において、動詞 *kick* 自体には穴をあけるという意味は含まれていないが、目的語位置に *a hole* が生起し、それに場所句が後続することによって、穴の創造を意味するようになる。なお、弱い穴あけ構文においては *a hole* は動詞の選択する目的語であるので場所句を省略することができる (*John dug a hole*)。一方、強い穴あけ構文においては *a hole/holes* は動詞が選択するものではないため、場所句を省略すると意図する「穴の創造」の意味では不適格となる (**Frances kicked a hole*)。そのため、強い穴あけ構文における *a hole (holes)* という目的語は非下位範疇化目的語であると言える。

結果構文と穴あけ構文の平行性から、強い穴あけ構文の下位分類についても結果構文との平行性または類似性があることが予想され、実際かなりの程度の類似性が見られる。

- (15) a. Frances kicked a hole in the fence. (=14a)
b. John shot a hole through the board.

例えば (15a) において、動詞の示す働きかけ (*kick*) を受けるのは、*Frances* はフェンスを蹴っている (*Frances kicked the fence*) ことから分かるように、*the fence* である。「穴があく」という変化を被るものは、フェンスに穴があくのであるから、*the fence* である。そのように考えると、動詞の示す行為を受けるものと「穴があく」という変化を被るものが同一参加者 (*the fence*) であることが分かる。加えて、穴があくのはフェンスの蹴られた部分 (足が触れた部分) である。従って (15) のタイプの穴あけ構文を、**[同一参加者 (の同一箇所)] に基づく穴あけ構文**と呼ぶことにする。

- (16) Israel's explanation apparently rests on Mr. Hook's telephone message saying militants had broken a hole in the wall surrounding the sheds and office where relief workers were hiding. (COCA)

(16) において動詞の行為 (*break*) を受ける参加者は *the wall* 全体である (*Militants had broken the wall*)。「壊す」という行為によって、「壁」としての一体的機能・価値を失っているからである。「穴があく」という変化を被るのは *the wall* であるが、ここで注意すべきことは、穴があくのはあくまで壁の一部であるということである。即ち動詞の行為を受ける参加者と結果句の変化を被る参加者は同一参加者であるが、「全体-部分」の関係にあることになる。このことから (16) のタイプの穴あけ構文を、**[全体-部分] に基づく穴あけ構文**と呼ぶことにする。

- (17) a. He was teaching himself to dance so that he could impress a real pretty gal named Sally Sugartree, who could dance a hole through a double oak floor. (=2b)
b. I'd been stingy about wearing them because I didn't want to walk holes in the soles before my feet got big enough to fill them. (=14b)

例えば (17a) において、動詞 *dance* は非能格自動詞であるため、動詞 *dance* の内在的働きかけを受けているものは *Sally Sugartree'* であるとする。「穴があく」という変化を被るものは、踊るという行為が行われた場所、つまり *a double oak floor* である。ここで、*Sally Sugartree'* と *a double oak floor* は物理的に接触していることが分かる。このことから (17) のような穴あけ構文を、**[接触] に基づく穴あけ構文**と呼ぶこととする。

- (18) a. I can sneeze a hole through a tissue or even a paper towel on some days.
(<http://www.tumblr.com/tagged/and%20it%20kind%20of%20scars%20me> [2013/6/25])
b. Super Saiyans at level 3 seem to be able to shout holes in different dimensions.
(<http://www.narutoforums.com/showthread.php?t=57648> [2013/6/16])

例えば (18a) において、動詞 *sneeze* は非能格自動詞であるので、動詞 *sneeze* の内在的働きかけを受ける参加者は *I'* である。「穴があく」という変化を被るのは、「くしゃみをする」という行為のエネルギーが向けられる *a tissue or even a paper towel* である。これらの参加者間の関係を考えると、これらは接触しているわけではないが物理的な隣接関係にあると言える。即ち、「私」と「ティッシュ」は接触しているわけではないが、影響の及ぶ程度に隣接していることが分かる。このことから、(18) のような穴あけ構文を **【隣接性】に基づく穴あけ構文** と呼ぶことにする。

結果構文と同様に、動詞の働きかけを受ける参加者と「穴があく」という変化を被る参加者との関係という観点から様々な例を見てみると、(13), (15), (16), (17), (18) と行くに従って、働きかけの影響が（前置詞句で表される）特定の場所に及ぶ範囲で参加者間の緊密性が弱くなっていることが分かる。[同一参加者（の同一箇所）] の関係であれば動詞が示す働きかけの影響が場所句の示す対象に及ぶことが容易に理解されるが、【隣接性】のような参加者間の緊密性が弱い関係であると、動詞の示す働きかけが対象に及ぶことを理解するには何らかの力の作用を想定することが可能である必要がある。例えば影山 (1996: 280) は **The elephant danced a hole in the wall* によって「動物園の象がダンスして、その振動で管理人室の壁に穴があいた」（象は壁に触れていないことに注意されたい）という状況を描写できないと述べているが、これは本稿の観点からすると、参加者間の物理的関係は隣接関係にあるものの、*dance* という行為による力の作用が *the wall* に及ぶと解釈することが困難であることに依っているものと思われる。従って、この文に関しては参加者間関係の緊密性が弱くなることで力の作用を感じるものが困難となり、そのため容認不可能になるものと思われる。

4. 認知構文論による分析

以上では、結果構文と穴あけ構文の分類や連続性、それらにある平行性について見てきた。次に、これらのことについて認知構文論の観点から考察を加えることを試みる。

4.1 理論的枠組み

構文理論 (Construction Grammar) においては動詞とは別に、慣習化された形式と意味の対である「構文 (construction)」という存在を認め、動詞が持たない参加者については構文によって与えられると考える (Goldberg 1995)。例えば *He sneezed his nose red* においては、結果構文によって動詞 *sneeze* が持たない参加者 (patient と result-goal) が与えられることになる。図 1 で示しているのは、結果構文の持つ項役割 (argument role) と動詞 *sneeze* の持つ参加者役割 (participant role) の融合である。sneezers は agent の一種として見なせるため、これら 2 つの役割が融合し、主語として具現化する。patient と result-goal に相当する参加者役割が動詞には存在していないが、これらの役割は構文によって与え

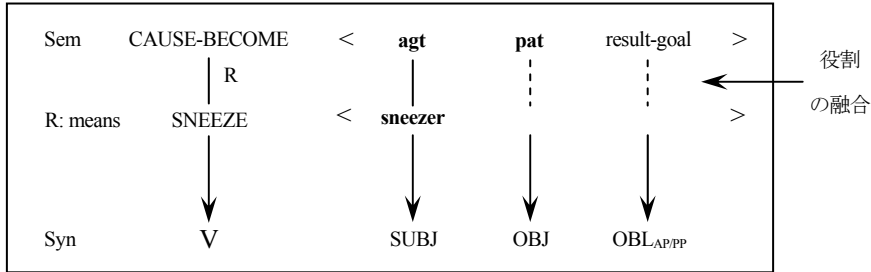


図1：結果構文と *sneeze* の合成構造 (Goldberg 1995: 54 より一部改変)

られ、それぞれ直接目的語、斜角語句として具現化する。意味についても、「何かを状態変化させる (CAUSE-BECOME)」という意味が動詞 *sneeze* の意味と融合し、結果として「くしゃみをすることによって、何かを状態変化させる」という意味になる。

また、本稿では動詞や構文の意味表示として行為連鎖 (action chain) を用いる (Horita 1995; Langacker 1991; 谷口 2005)。行為連鎖とは、参与者とそれらの間にある力動的関係によって事象構造を表示したものである。図2における円は参与者を表し、二重線矢印は働きかけを表している。一本線矢印は変化を表し、四角は参与者が特定の {位置/状態} にあることを示している。また、太線はプロファイル (profile) された部分を表し、細線はプロファイルされていない部分を表す。

(i) は働きかけ事象を表示している。動作主 (*John*) から対象 (*Bill*) への働きかけはあるが、その働きかけの結果 *Bill* がどのような状態になったのかについては指定していない。(ii) は状態変化事象を表示している。動作主 (*John*) が何らかの方法で働きかけ、その結果として対象 (*the vase*) が「壊れた状態」になったことを示している。(iii) は創造事象を表し、動作主 (*John*) が目的語参与者 (*a cake*) が元々存在しないところから、動詞の行為を行うことによって、目的語参与者を創造するプロセスを表示している。破線の円 (便宜的に ϕ で表す) は、行為に先立って目的語参与者 (この場合は「ケーキ」) が存在しないことを示している (創造事象の表示については Horita (1995: 162-163), 谷口 (2005: 82-83) を参照)。

本稿では Goldberg (1995) のように構文の存在を認め、構文によって動詞の持たない参与者が与えられると考えるが、動詞と構文の形式・意味に関連する事象構造については Goldberg が採用する表記法ではなく、行為連鎖を用いて表記することとする (cf. 谷口 2005)。

(i) John hit Bill. [働きかけ事象] (ii) John broke the vase. [状態変化事象] (iii) John made a cake. [創造事象]

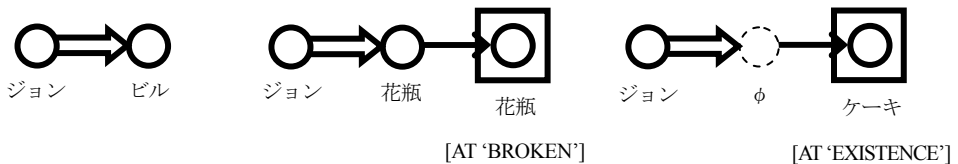


図2：行為連鎖

4.2 結果構文

以上で示した理論的枠組みに基づき、様々な結果構文についてどのように扱えるか考えてみたい。まずは弱い結果構文、強い結果構文における〔同一参加者〕に基づく結果構文の認知構造を図3に表示する。図3における(i)は弱い結果構文の認知構造を表示しているが、ここでは動詞と構文の認知構造が完全に一致している。これにより、動詞は構文を精緻化(elaborate)したものとなるので、動詞の認知構造が実際の文における認知構造にそのまま反映されることになる。斜線の円は、動詞が語彙的に指定する変化対象であることを示している。動詞自体が状態変化(‘COLORED’)を表し、結果句はその結果状態を詳述(pink)する付加詞(adjunct)である(Iwata 2006)。

(ii)は強い結果構文の認知構造を表示しているが、ここでは動詞と構文の認知構造が一致していない。動詞自体は状態変化を含意しないため、「変化・結果状態」が欠けている。従って「変化・結果状態」については構文により与えられることになる。構文により与えられる要素については、灰色の連鎖で示してある。灰色の円は、構文によって与えられる変化対象を表している。また、動詞が本来的にプロファイルする参加者はthe metalであり、結果句の変化を被る参加者もthe metalであるので、同一参加者に基づいて動詞と構文が融合していることが分かる。真ん中の2つの円を囲む楕円は、参加者間

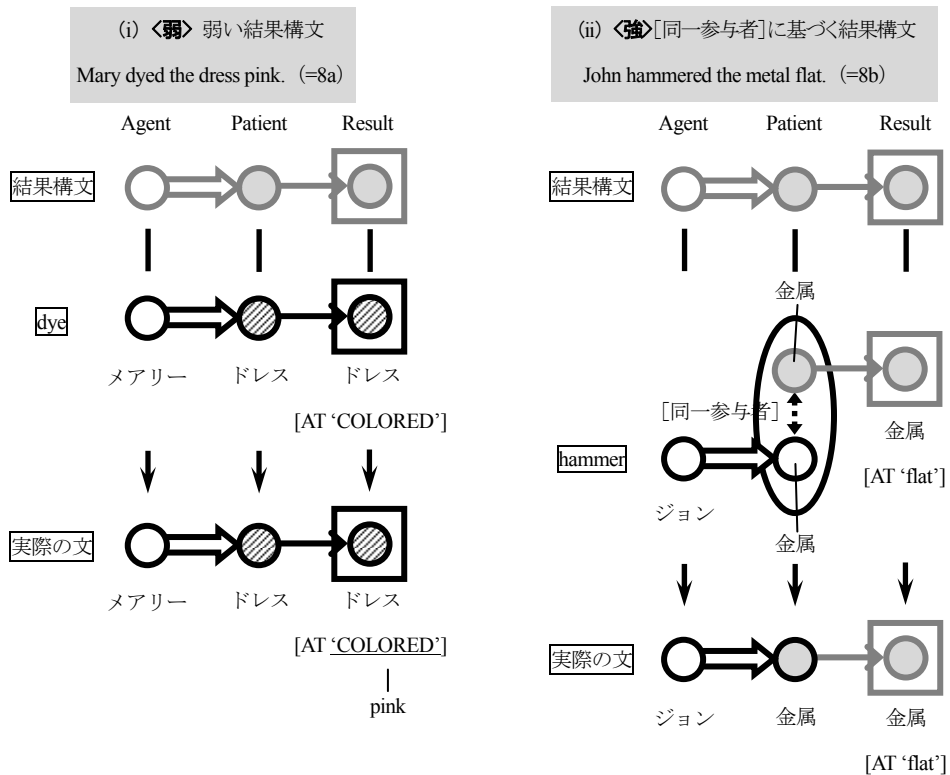


図3：弱い結果構文と強い結果構文における動詞と構文の融合

の結び付きの緊密度を表している。この場合2つの参加者は同一参加者であり一体のものであるので緊密度は最も高く、そのことを太線で示している。

次に、[全体-部分]に基づくもの、[接触]に基づくもの、[隣接性]に基づくものについて見ていきたい。ただし紙幅の関係上、図4において「結果構文」の認知構造については省略して表示する。図4の(i)、(ii)、(iii)は強い結果構文を表示しているが、いずれにおいても動詞と構文の認知構造が一致しておらず、動詞に欠けている要素は構文によって与えられることになる。まずは(i)を見てもらいたい。動詞が語彙的に指定する参加者(*the table*)が通常であればプロファイルされるはずであるが、結果構文によってそれと「全体-部分」の関係にある参加者(*a leg*)が与えられてプロファイルを得ることで、実際の文では*a leg*が目的語として表現されることになる。この時、動詞*break*が語彙的に指定する「テーブルの変化」についてはプロファイルされなくなり、背景化されることになる。(ii)では動詞が語彙的に指定する参加者(*the table*)と接触関係にある参加者(*the crumbs*)が構文によって与えられ、プロファイルを得て目的語位置に生起することになる。(iii)では動詞が本来的にプロファイルする「彼」と隣接関係にある参加者(*the napkin*)が構文によって与えられ、プロファイルを得ることになる。また、(i)では同一参加者の「全体-部分」に基づいているため緊密度は高いが、[同一参加者]に基づく結果構文よりは低い。そのことを細線の楕円で示した。(ii)では動詞の指定する参加者とは別の参加者との関係となるが、「接触」という緊密性が比較的高い関係にあるため、そのことを示すために破線の楕円で表示した。(iii)では参加者間が「隣接関係」という、今までのものと比べると

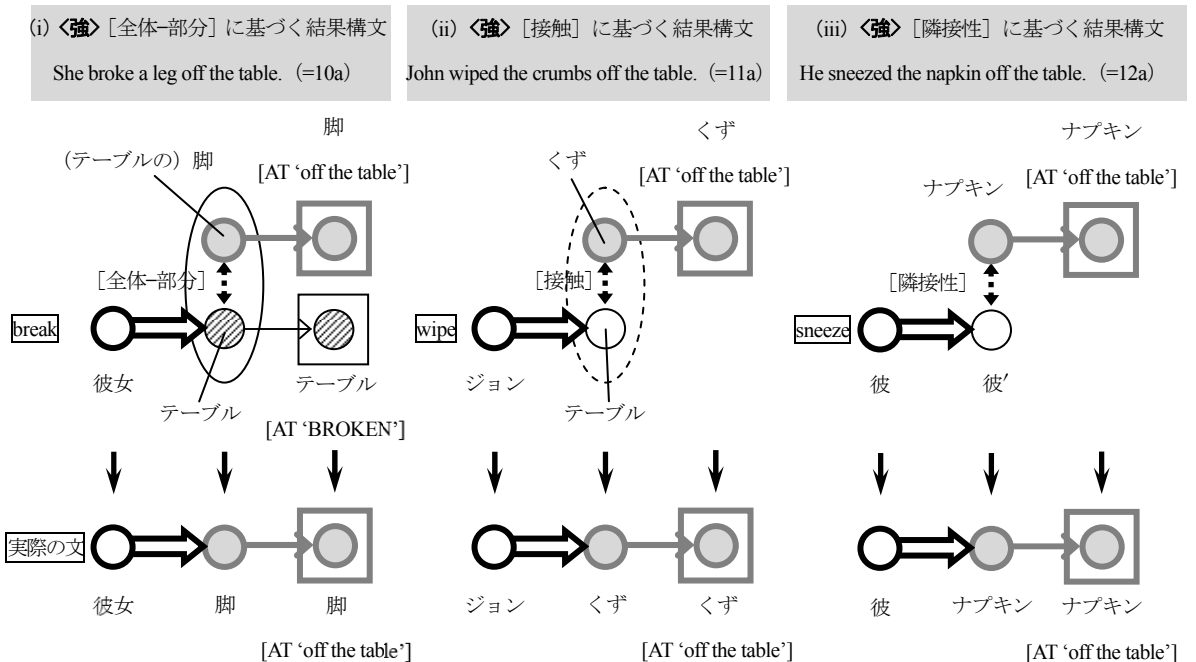


図4：強い結果構文の認知構造

緊密性が低い関係で結ばれているため、緊密度の高さを示す楕円は表示していない。

4.3 穴あけ構文

次に、穴あけ構文における動詞と構文の相互作用について考察する。弱い穴あけ構文、[同一参与者 (の同一箇所)] に基づく穴あけ構文の認知構造を図5に示す。図5の(i)は弱い穴あけ構文を表しているが、ここでは動詞と構文の認知構造が完全に一致している。これにより、動詞は構文を精緻化したものとなり、動詞の認知構造が実際の文における認知構造にそのまま引き継がれることになる。動詞自体が穴の創造を表し、場所句 (*in the ground*) は穴がどこに掘られたかについて詳述していることになる。

(ii)は強い穴あけ構文の認知構造を表示しているが、ここでは動詞と構文の認知構造が一致していない。動詞自体は穴の創造を含意しないため、「穴の創造・穴があいたという結果状態」が欠けている。従ってこれらの要素については構文により与えられることになる。また、動詞が語彙的にプロファイルする参与者は *the fence* であり、「穴があ

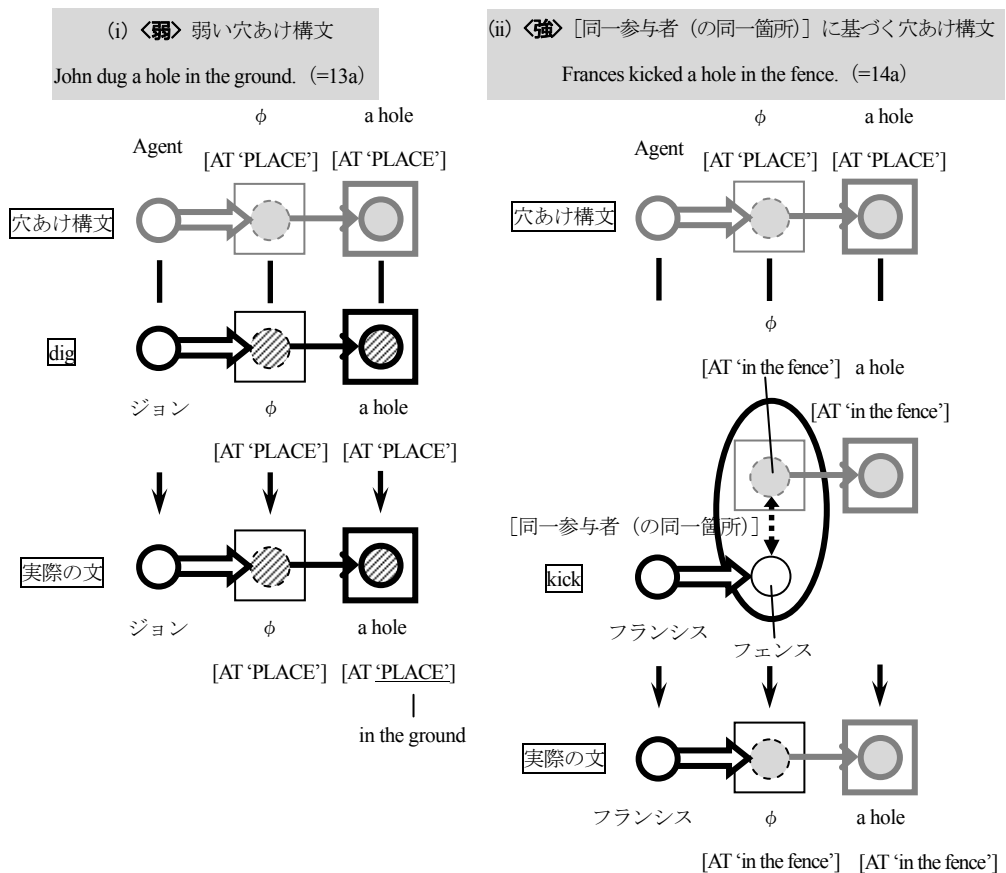


図5：弱い穴あけ構文と強い穴あけ構文における動詞と構文の融合

く」という変化を被る参加者も *the fence* であるので、同一参加者（の同一箇所）に基づいて動詞と構文が融合することになる。

次に、[全体-部分]に基づくもの、[接触]に基づくもの、[隣接性]に基づくものについて見てみよう。図6の(i), (ii), (iii)はそれぞれ強い穴あけ構文を表示しているが、いずれにおいても動詞と構文の認知構造が一致しておらず、動詞に欠けている要素については構文によって与えられることになる（なお、図6において「穴あけ構文」の認知構造は省略してある）。(i)について、動詞が語彙的に指定する参加者（*the wall* 全体）が通常であればプロファイルされるはずであるが、穴あけ構文によってそれと「全体-部分」の関係にある「穴」（つまり、壁にあいた穴）の創造が与えられてプロファイルを得ることで、実際の文では *a hole* が目的語として表現されることになる。この時、動詞 *break* が語彙的に指定する「壁の変化」についてはプロファイルされなくなり、背景化されることになる。(ii)では動詞が語彙的に指定する参加者（メアリー'）と接触関係にある「穴」（つまり、床にあいた穴）の創造が構文によって与えられ、プロファイルを得て目的語位置に生起することになる。(iii)では動詞が本来的にプロファイルする「私'」と隣接関係にある「穴」（つまり、ティッシュにあいた穴）の創造が構文によって与えられ、プロファイルを得ることになる。なお図5・6のそれぞれの認知構造において、真ん中の2つの参加者を囲っている楕円は、結果構文の場合と同様、参加者間の緊密性を表している。

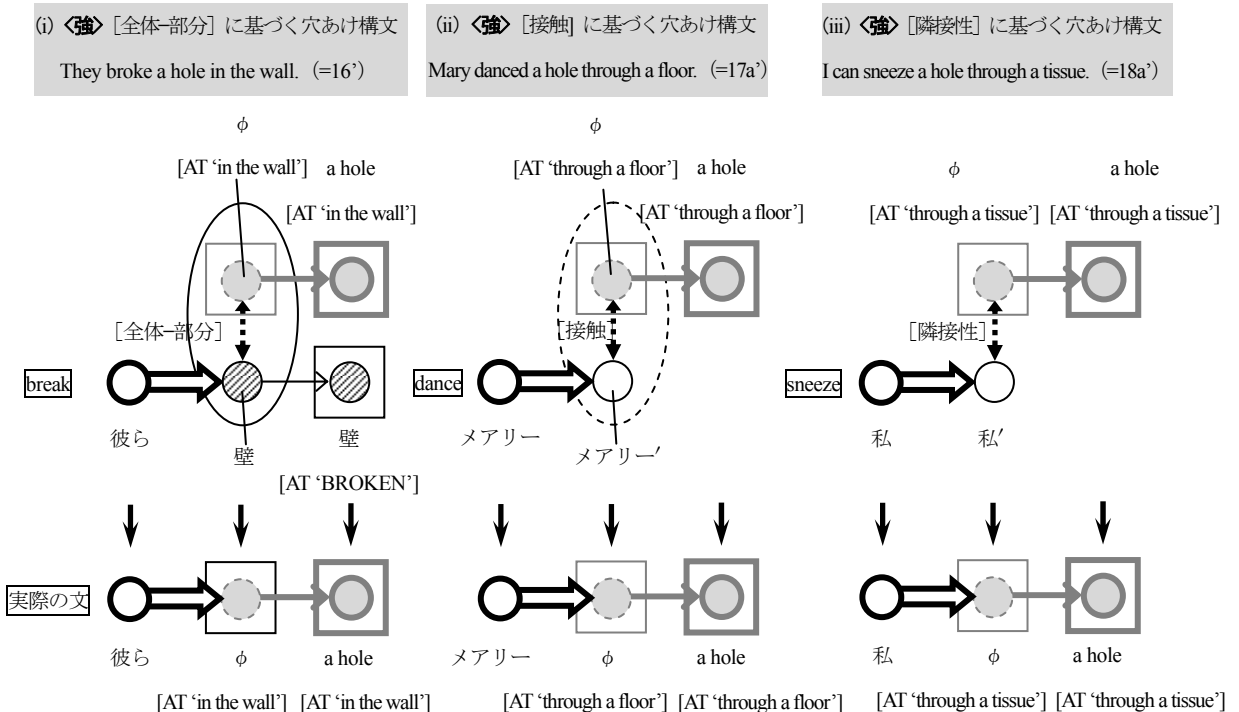


図6：強い穴あけ構文の認知構造

4.4 帰結

4.2 節と 4.3 節で結果構文と穴あけ構文に関する認知構文論的観点からの分析を提示してきたが、それではこの分析によって何が明らかになるのであろうか。

先ずは、構文拡張の方向性である。従来の構文研究では動詞の種類に着目した研究が多く、文中に生起する参与者についてはあまり注目されてこなかった。特に分類については、弱い構文と強い構文という動詞の種類に基づいた分類しか成されてこなかった (Nonaka 2010; Washio 1997)。しかし、動詞が語彙的に指定する参与者と構文によって与えられる参与者との関係に注目することにより、本稿で示してきた様々な種類の結果構文・穴あけ構文を自然な形で位置付けられ、同時に動詞の種類だけでなく参与者間関係についても平行性が見られることが明らかとなった。以上の分類を構文拡張という点で捉えれば、本稿において示してきた構文の拡張は、以下のような形で特徴付けることができる。即ち、主語参与者の行為による何らかの形での働きかけと影響が対象に及ぶことを保持する形で、動詞が本来的にプロファイルする目的語参与者と、構文によって与えられる参与者 (変化対象/創造物) と間の緊密性が、メトニミー的關係を保ちつつも徐々に弱まっていくプロセスである。

本稿の分析は Goldberg (1995) では注目されていなかった構文拡張の側面を明らかにできるものであると思われる。Goldberg (1995) は構文の拡張に関して放射状ネットワークによる分析を行い、中心的構文を様々な継承リンク (inheritance link) によって関連する構文と結び付けることで構文の拡張を捉えている。しかし、放射状ネットワークだけでは本稿で扱ってきたような例を十分に扱うことができず、その連続性を捉えることはできない。

本稿で論じている構文の拡張は放射状ではなく直線的に生じるという点で、中村 (2008) の提案する「進化の経路 (evolutionary path)」に近く、共有する点も多い。しかし、中村はこれを「主語動作主から目的語参与体 (の変化) に対する直接的働きかけが徐々に希薄化する方向へ展開する」(中村 2008: 635) としている一方、本稿の分析においては動詞が語彙的に指定する参与者と構文によって与えられる参与者との間の関係に重要な役割を与え、この種の拡張を主語参与者の行為による何らかの形での働きかけと影響が対象に及ぶことを保持する形で参与者間の緊密性が弱くなっていくとしている点で異なることになる。

また、認知構造から文法関係の予測も可能である。Langacker (1991: 217) は主語となるのはプロファイルされた行為連鎖の先頭 (“head”) であり、目的語となるのはプロファイルされた行為連鎖の末尾 (“tail”) であると論じているが、このことは本稿の議論にも当てはまる。例えば図 6 (i) について、主語となるのは「実際の文」の連鎖の先頭にある *they* であり、目的語となるのは連鎖末尾の *a hole* である。そしてその「穴」のあく場所が前置詞句 *in the wall* によって示される。他の穴あけ構文・結果構文についても同様である。

最後に、結果構文と穴あけ構文に課される意味的制約について検討したい。今までの議論からかなりの程度多様な結果構文・穴あけ構文が存在することが明らかとなったが、これらには一定の制限が課される。ここでは穴あけ構文を中心に見てみたい。

- (19) a. He was teaching himself to dance so that he could impress a real pretty gal named Sally Sugartree, who could dance a hole through a double oak floor. (=2b)
 b. *The elephant danced a hole in the wall. (影山 1996: 280)

(19a) は分類で言えば [接触] に基づく穴あけ構文であり、「ダンスをして、(接触した) 床に穴があいた」という意味で理解することができる。(19b) は分類に当てはめて言えば [隣接性] に基づく穴あけ構文ということになるだろうが、「ダンスをして、(隣接した) 壁に穴があいた」という意味で理解することは困難であり、容認されない。同じ動詞が用いられているにもかかわらず容認性が異なるのは、(19a) の方が [接触] というより緊密性の高い参与者間の関係に基づいていることによって、「踊る」という行為による場所への力の作用をより理解しやすくなり、従って (19b) と比べて (19a) の容認性が高くなるように思われる。同じことは結果構文についても言える。*The chef cooked the kitchen walls black* (=6a) は3.1 節と註4 で見たように、特定のコンテキストを想定しない限り容認性が低く、不自然であると判断する話者が多い。これは1 つには [隣接性] という緊密性の弱い関係に基づいており、かつ *cook* という行為によって *the kitchen walls* に対して何らかの力の作用を及ぼすと解釈することが困難であることに依っていると思われる。このような観点からすると、参与者間関係の緊密性が高いと力の作用を読み取ることがより容易となり容認性が上がる傾向がある一方、緊密性が低いとそれがより困難となり容認性が下がる傾向があると言える。このことは、参与者間の緊密性が動詞と構文の融合において一定の役割を果たしていることを示しており、容認性を左右する1 つの要因となっている可能性を示唆している。

5. 結語と課題

本稿では結果構文と穴あけ構文を対象として、特に参与者間の緊密性の観点から連続性が見られ、加えてこれらの構文の間に拡張の方向性の点で平行性が見られることを示した。また、認知構文論の観点から結果構文と穴あけ構文について統一的説明を与えることができる可能性を示し、その帰結として、Goldberg (1995) では明確に示されていない構文拡張の側面があること、動詞と構文の融合には参与者間の緊密性が一定の役割を果たしていること、結果構文と穴あけ構文には類似した意味的制約が課されることが明らかとなった。

今後の課題として挙げられるのは、意味的制約をより詳細に検討することである。本稿では参与者間の緊密性という観点から動詞と構文の融合における制限について考察したが、それは容認性を左右する1 つの要因に過ぎないものと思われる。どのような条件の下で結果構文・穴あけ構文が適格 (不適格) であると判断されやすいのかについて、より一層考察していく必要がある。また本稿で示した構文拡張の方向性は、結果構文と穴あけ構文だけでなく、他の構文についても見られるかもしれない。他の構文で類似した拡張が見られるかどうかについても今後調査していく必要がある。

註

- ¹ 例文における下線部は著者が付したものである。また本稿で用いる例文、特にインターネットや文献から収集した用例でコーパスによって検証できなかったもの及び著者による作例については、9人のインフォーマントに容認性を確認した。
- ² 位置変化を表すものは使役移動構文と呼ばれることもあるが、本稿では位置変化も状態変化も変件事象として捉え、変件事象を表すものを結果構文と呼ぶこととする (cf. Goldberg & Jackendoff 2004)。
- ³ Levin & Rapoport (1988) においても結果構文と穴あけ構文、加えて *one's way* 構文や動作表現構文 (*Pauline smiled her thanks*: p. 277) などに一定の共通性が見られることが指摘されており、それらの構文を語彙的従属 (lexical subordination) というプロセスによって統一的に説明しようとしているが、そこではそれぞれの構文の分類や拡張に関する詳細な分析はなされていない。
- ⁴ (12b) を「非常に不自然」とであると判断した話者のうち、「多くのものを長時間に渡って燃やし、その煙が徐々にキッチンの壁を黒くしていった」というコンテキストを想定すれば容認性が上昇すると回答した話者もいた。どのようなコンテキストで結果構文や穴あけ構文の容認性が上がるのかについては、今後の検討課題としたい。

参考文献

- Carrier, J. and J. H. Randall. 1992. The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives. *Linguistic Inquiry* 23: 173-234.
- Davies, M. 2008-. *The Corpus of Contemporary American English*. Available online at <http://corpus.byu.edu/coca/>.
- Goldberg, A. E. 1995. *Constructions*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, A. E. and R. Jackendoff. 2004. The English Resultative as a Family of Constructions. *Language* 80: 532-68.
- Horita, Y. 1995. A Cognitive Study of Resultative Constructions in English. *English Linguistics* 12: 147-72.
- Iwata, S. 2006. Argument Resultatives and Adjunct Resultatives in a Lexical Constructional Account. *Language Sciences* 28: 449-96.
- Jespersen, O. 1927. *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part III*. Heidelberg: Carl Winter.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論』 東京：くろしお出版.
- Langacker, R. W. 1991. *Concept, Image and Symbol*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Levin, B. and T. R. Rapoport. 1988. Lexical Subordination. *CLS* 24: 275-89.
- 中村芳久. 2008. 「構文のネットワーク表示と意味地図表示」『日本認知言語学会論文集』 8: 633-36.
- Nonaka, D. 2010. A Usage-Based Approach to the *a Hole* Construction. *Colloquia* 31: 89-103. Keio University.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 鈴木亨. 2011. 「複合的変件事象の意味論に向けて」『山形大学人文学部研究年報』 8: 19-37.
- 谷口一美. 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 東京：ひつじ書房.
- Washio, R. 1997. Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6: 1-49.

